

「こわれやすいもの」

瀬戸内 流青

ここに一枚の写真がある。寺に続く砂利道に立つ家族。左端の少女は半袖の片腕を不自然に前へ突き出して、よく見るとその細い腕のそこかしこに何やら小さな粒々がまわりついでている。まだ幼い私が、植木の間に見つけたカタツムリたちを腕に数匹はわせているのだ。雨のあとだったのだるうか、あの日は本当にたくさんのかたつむりが見つかって私は有頂天になつていた。大人の制止も聞かず、つまんでは腕に乗せながら歩いてきたから、何気なく撮られた家族写真にそのままの姿で写つてしまったのだった。

生き物好きは今も相変わらずだが、あの生つとりと肌の上を移動する感触をもう一度味わいたいとは、さすがに思わない。

当時の私は庭の石をひっくり返して小さな虫を見つけては夢中で観察するのが日課だった。ばねのように勢いよく跳ぶ虫、くねくね動く得体の知れない虫、色や形も様々で「神の造形美」「進化の奇跡」などという言葉を思いつくはずもない子供ながら、一つ一つの出会いに心の奥底から感動していた記憶がある。

ある梅雨のこと、そんな私はカタツムリに

魅せられ収集を始めた。透明なケースに土や石を入れ、水を入れる容器や枝ぶりの良い葉っぱを配置した。カタツムリにとつて快適な環境を整えようと頭をひねった。そして、十匹近いカタツムリたちをそこに住ませ、雨ばかりで外に出られない季節を、カタツムリの飼育で紛らわせて過ごすことにした。身近に置いておけるようになる。カタツムリへの愛着は増す一方だった。

壁を前進する腹の裏側のうねりは、いくらか眺めても飽きなかった。突付くとビクリと縮まるツノは水でできたように繊細で、やがてのんびり、しかし慎重に押し出される様子も不思議で楽しかった。

そんなある日、事件が起こった。会社から帰宅した父が、台所に置いてあった私のカタツムリケースに気が付き、なぜか激怒したのである。

「なんだこれは！」

毎日帰りが遅く、私と話をする暇もなく、もちろん私がカタツムリを飼っていることも全く知らなかった父が、すごい剣幕で母を相手に怒鳴り散らし始めた。父は今でこそ好々爺といった風情だが、当時は典型的な亭主関白で、家族を震え上がらせる短気な雷親父だった。田舎育ちで自然界全般に詳しく、私を生き物好きにした張本人でもあったが、その父がその夜は私のカタツムリを明らかな目に嫌悪していた。不潔なものを見るような目つき

で睨んでいた。箱庭のような自然しか知らぬ
現代っ子で、おセンチな少女だった私は、
生き物に対するまなざしが根本的に違っている
たのかもしれない。台所という場所がいけなかつたのだから、
たまたま会社でなにかあつて機嫌が悪かつた
のだらうか、それとも母に対して不満があつた
のだらうか。そんなことを考える余裕は子供
の私にはなかつた。
とにかく父の予想外の反応と怒声に傷付き、
褒めてもらえなかつた自信作の小さなケース
を抱えて庭に飛び出した。父の反応と怒声に傷付き、
それを一瞬の出来事だつた。
けくそになつて、すべてを庭の闇の中へ投げ
出してしまつたのだ。すべてを庭の闇の中へ投げ
し、部屋から漏れるあかりに照らされて、餌と
た水羊羹の空缶の底が芝生の上に光つていた。
カ、タツムリの楽園は私の突然の裏切りによつ
て、めちやくちやに崩壊してしまつた。気の引
いた手でカタツムリの姿を探したが、もう後
の祭りだつた。隠れ場所にと入れておいた石
が災いしたのだ。光を透かすほど薄い殻が、
この宝物はことうして一瞬の衝動の犠牲となつて
消えてしまつた。
さな白い卵塊が産み付けられていた。これだ

けは無事だったのだ。私はその卵を見つめながら湿った芝生に座り込み、とめどなく涙を流した。部屋の中からは私のために涙声で父に何かを訴えてくれている母の弱々しい声がかすかに聞こえていた。

苦い記憶になつてしまつたカタツムリの思い出は、例の写真によつて何度も蘇つては私の胸を締め付けた。ツムリの命。せめても罪滅ぼしにと大事に育てた卵から孵つた赤ちゃんたちは、小さくてもちゃんと渦巻いた透明な殻を背負つて、健気に生きてくれた。二人目の子供をおなかに宿した今、少女時代に心に強烈に刻み込まれた命への熱い思いが、またこみ上げてきている。長男はもう二歳。ずいぶん成長して、しっかり歩き言葉も話すようになった。とはいへ、柔らかい腕は私の片手で握れるほど華奢だし、発展途上の脳みそを薄い骨で抱え込んだ大きな頭は少しの衝撃でも内部まで影響を受けるという。「いやあの！」などと一丁前に反抗してみせても、体はまだ未熟でもろい。大人の私が癩癩を起こして暴力を振るえばたちまち壊れてしまふ、か弱い生き物だ。

簡単に砕けてしまつたカタツムリの殻。命のはかなさ。

い 幼
日 の 児
の 虐
私 待
が 死
泣 き の
き じ ニ
じ ャ ュ
く ー
っ ス
て が
い 流
る れ
る る
。 た
た び
に び
、 に
遠

完